

鳴神山

柳津小学校
学校だより

2016. 5. 2
NO. 2



無事故で楽しい連休を！～健康・安全に過ごしましょう～

世間では10連休というところもあるようですが、本校でもゴールデンウィーク真っ最中で、明日以降も子どもたちが楽しみにしている連休が続きます。

学校では、安全で充実した休日にするために、友だちと遊びに出かける時や自転車に乗る時の約束ごとなどについて確認しておりますが、ご家庭におかれましても、先日学校より配付いたしました「連休中の事故防止について」の内容を再度ご確認ください、遊び方やお家での過ごし方などについてお子さんとよく話し合い、事故防止にご配慮いただきたいと思います。

また、最近の不安定な（寒暖差の激しい）天気や連日の運動会の練習から、体の疲れも出てくる頃かと思われます。この連休を上手に利用して体と心を十分休め、21日（土）の運動会に備えていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。



PTA活動もよろしくお願いいたします！

4月22日（金）に開催いたしました、平成28年度第一回目の授業参観並びに各種委員会、そして、PTA総会では、ご多用の中、ご来校いただきまして誠にありがとうございました。特に、一年生の保護者の皆様におかれましては、午前中から給食試食会にもご参加いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

各学年の授業の様子はいかがだったでしょうか。児童一人ひとりが、進級した喜びと新しい学びへの期待、さらには、保護者の皆様に参観していただいているうれしさから目を輝かせ、楽しそうに活動していたと思います。子供たちの元気とやる気を、とても頼もしく感じます。

また、PTA総会におきましては、新年度の役員も決定いたしまして、いよいよ本校のPTA活動も本格的に活動を開始することができます。5月には、運動会やPTA奉仕活動等、大きな行事が予定されておりますので、ご多用の中とは存じますが、ご協力くださいますようお願いいたします。



【ランチルームでの給食試食会】

【平成28年度PTA役員】

職名	氏名	児童名(学年)	職名	氏名	児童名(学年)
会長	土橋 諭	咲希(6年)	会計	佐々木静香	恋華(4年)
副会長	武田 剛	永遠(5年)		新井田雅人	真宙(2年)
	鈴木 礼	優仁(4年)		菊地 晴代	(学校)
庶務	橋谷田 東	(学校)	監事	佐藤 勝	玲華(6年)
	齋藤 美恵	尚哉(5年)		長谷川宣夫	陽莉(6年)
	伊藤 和也	蛍太(5年)		原 裕司	(学校)
	小林 憲子	(学校)			

どうぞよろしく
お願いいたします。
旧役員の皆様、
大変お世話に
なりました。
お疲れ様で
した。

教育は『愛』です ～『愛』とは、時には自己犠牲もいとわないことである～

P T A 総会の校長あいさつの中でもお話しさせていただきましたが、これは、私（川井）の信念であります。そして、これを具現するもの、つまり、学校経営の根底にあるものは「親の目でみる」ことであり、今年度のスタートにあたり、本校全職員でも確認したところです。

かけがえのない子どもたちに（学校における）親としてかわり、共に喜んだり、時には涙したりと、保護者の皆様と同じ思いを共有できることを心からうれしく思います。

では、何故に私が『愛』や『親としての思い』にこだわるのか、ここに、約7年ほど前に、ある機関紙に「教育随想」として載せた原稿を紹介いたします。私の思いが少しでも、皆様の心に届いたら幸いに存じます。

親の目で…

「先生、教育とは何だい？」

これは、私が初任の時にある保護者から発せられた質問です。思わず、

「教育とは愛です」

と答えたことが忘れられません。『思わず』と言いながらも、あながち、いい加減に（嘘を）答えたつもりはありませんでした。すると「俺は、人の道を教えることだと思っただけだね…」との答えが返ってきました。「なるほどなあ」とは思いましたが…。実際の所、どう答えるべきだったのでしょうか。もし、みなさんなら、何と答えますか。

私の学級・学年経営のモットーは『親の目で』です。2児の親になった現在もちろんですが、初めて教壇に立った時から、この思いは変わることがありません。「若いうちから生意気だ」とか「何も知らないくせに…」などの批判も聞こえてきそうですが、私は次のように考えます。

親も教師も目の前の子どもを『可愛い』『大切にしたい』と思う気持ちは同じはずではないでしょうか。単純な計算で甚だ恐縮ですが、子どもたちは一日約8～9時間は睡眠をとって（夢の中に）います。一日は24時間ですから、学校で生活している時間を考えますと、教師と過ごしている時間と親とかかわっている時間はほぼ同じくらいです。休日を除けば、もしかすると教師の方が多く子どもと接しているかも知れません。そんな目の前の子どもたちに、教師も親と同じくらいの『愛情』を注がないでいられるはずがないのです。

自分がその子どもの親ならどうしてあげたいのか、また、どうすべきなのか。

自分がその子どもの親なら教師にどうしてほしいのか。

と、教師は常に問い続け、その子どもに対して最善を尽くすべきなのです。必要ならば叱ることもあります。もちろん、一人ひとりのよさを見取り、認めてあげることが前提です。何よりも大切なのは、そこに本当の『愛』があることです。時には親と同じように、自己犠牲を伴ってでもかけるべき『愛情』をもつことができるということなのです。いかがでしょうか。

最近、以前よりもずいぶん涙もろくなったと感じています。卒業式はもちろん、運動会や音楽祭でさえも、子どもたちの姿に涙が流れます。「何に涙を流しているのか、なぜそれほどまでに感動しているのか」自問自答しながらも、「これこそが『子どもへの愛』なのか」と、自分なりに受け止めようとしています。「先生あのね…」「わたしはね…」と喜びも悲しみも素直に語りかけてくれる子どもたちを見ていると、どんな時でも「この子どもたちの『親』でありたい」と私は思うのです。

今、もし19年前と同じ問いを投げかけられても、やっぱり私は自信をもって「愛です」と答えます。そして、いつまでもそう答えられる教師でありたいと願っています。

（文責 川井 孝寿）